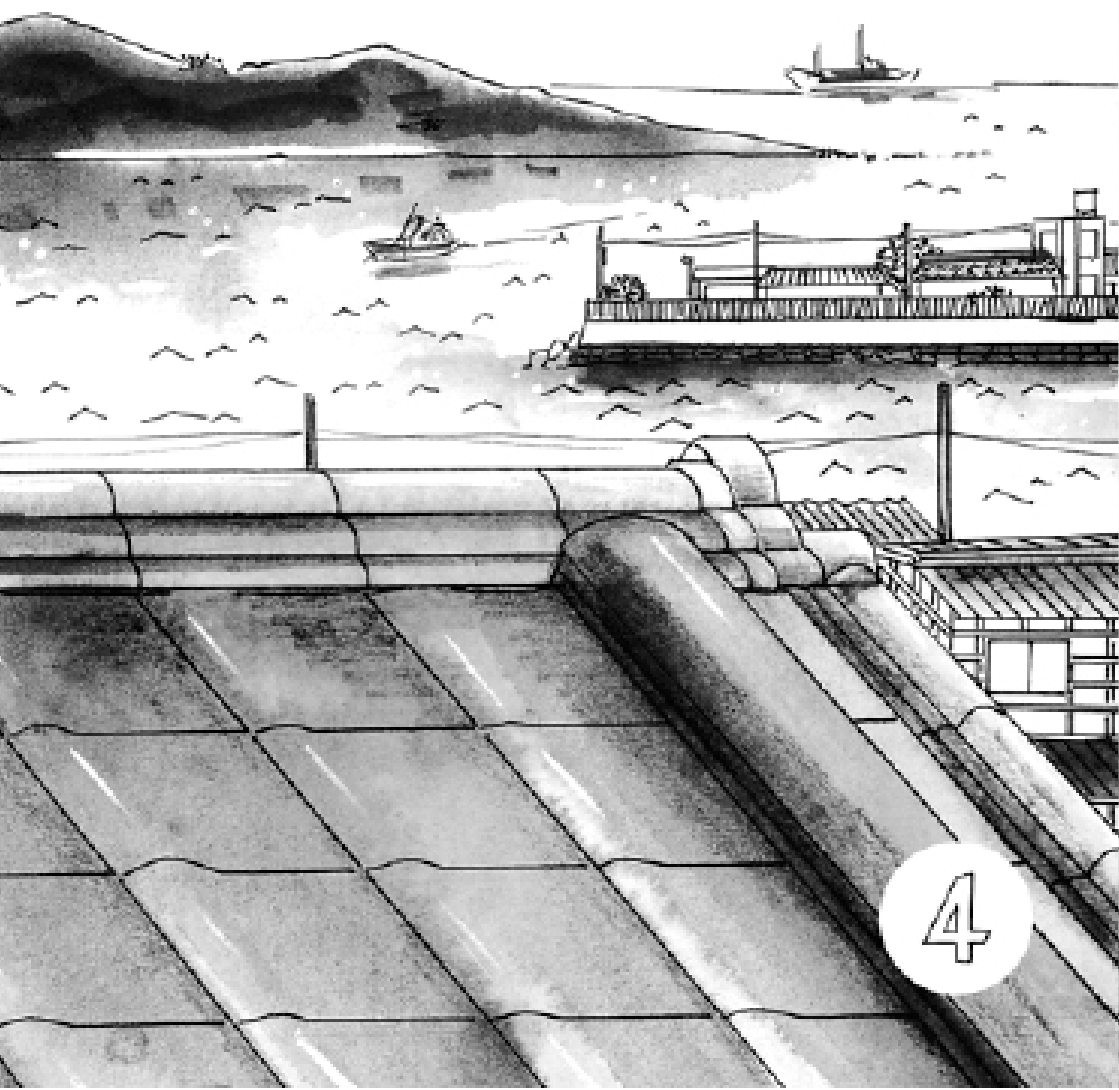


令和2年4月5日発行(毎月5日1回発行)

第40巻4月号(通巻729号)

風土



4

花に酔ひ傘忘れたる夜道かな

(句集『四温』より昭和四十八年作)

この句には「永井東門居邸お花見句会十一句」の前書があります。「東門居」は作家の永井童男俳号で、小説家としての桂郎師の師匠です。童男は市井を素材とした短編に優れ、桂郎師に多大の影響を与えました。「東門居」を囲んでの気の合った作家や俳人の仲間との句会です。その後の宴も盛り上がったことでしょう。「花に酔ひ」とありますが、「花と酒に酔ひ」でしょう。出掛けの雨もすっかり止み、夜道を酔い戻る折に、傘を忘れたことに気が付いたのです。至福の時を過ごせたのだからまあいいか。

一椀の茶粥や近く河鹿の瀬

(句集『四温』より昭和四十八年作)

この句も「酒井章鬼君別棟に二泊」の前書があります。酒井章鬼は浜明史と並んで、関西の愛弟子です。奈良に住んでいるので、よく訪れました。章鬼と夜を徹して語り合った後の、朝の「奈良茶粥」の旨いこと、沢からの河鹿笛もまたご馳走です。

くれなゐの空のさざなみ滝ざくら

(句集『貴椿』より平成十三年作)

この句は「三春滝桜」を詠んだものです。器師の提唱する「命ふたつ」を見事に具現化しています。「命ふたつ」は対象(相手の命)と向き合い、その懐に入り込んで(相手の命)を輝かすことを簡潔に述べた言葉です。虚子の写生で言う「感情移入による写生」にあたります。器師は「滝ざくら」と真撃に向き合った末に「くれなゐの空のさざなみ」と感情移入しました。「滝ざくら」の有り様(命)をそのように捉えたのです。読む側には大空いっぱい広がった紅の花のさざなみが、次々押し寄せてくるように見えてきます。「滝ざくら」の圧倒的な存在感が伝

「一力」に盛り塩聳てり夕ざくら

(句集『貴椿』より平成十三年作)

この句の「一力」は祇園の花見小路の「一力茶屋」のことです。仇討の前の大石内蔵助が放蕩をした処で有名です。祇園の夜が始まったことを、「一力」の「盛り塩聳てり」で表出し、舞妓や芸妓の華やかな行き交いを「夕ざくら」に重ねています。

吉兆 南うみを

かたまつて玻璃戸に木の葉あたる音
米朝の情話つくづく米こぼす
枯芦をいたくしなはせ雀立つ
依代の笹のよぢれも残り福
福笹の鯛が一力亭くぐる

吉兆を弓手にうどん立ち喰ふも
あはうみのはたて湯気噴くとんどかな
引き余す大根の葉のいよよ垂れ
あはうみに日の道現るる春隣
二月来る赤き袴をひるがへし
磨かれてなやらひを待つ柱かな
あはうみに食ひ込んでゐる雪解川



竹間集

同人作品



冬雲雀

門伝史会

年の市大きな闇に隣りをり
老いてなほ夢ふくらます福寿草
新しき太筆ほぐす筆始
筆跡の変はらぬ友の賀状かな
繭玉の華やぎ芝居はねし廊
臘梅の透けて晩年見えてくる
ふんだんに青空のあり冬雲雀

春のベレー帽

浜 福恵

海猫飛ぶや「伊根満開」を年酒とす
嬰抱き礼者「伊根満開」女杜氏の造る女性にも愛される銘酒となりて孫は来ぬ
七種のひとつ二つは野に摘みて
海を見てゐる一つ日向に寒雀
三寒の土をもたげて露の臺
狂ひ咲く乙女椿や水に挿す
十三回忌迎ふや春のベレー帽

初明り

鈴木 石花

師桂郎の句屏風二面拝しけり
実生より背丈を凌ぐお茶の花
小春なる公証人へ遺言書
着膨れて仕舞ふ控への遺言状
元号の令和ゆかしき初明り
思ひ出づ「三寒四温」師の名句
齋場に地続きの苑梅探る

木々芽吹く

山田 暢子

山茶花はすぐに散る花燃えながら
氷柱つらら空の青さが眼に沁むる
狐火に遇はざるままに老いゆくか
センター試験終ればすぐに来るメール
寒明くる今朝より変へて散歩道
学び舎の記憶鮮やか木々芽吹く
四温かなあやとりをして長寿会

初日記

小林 輝子

目鼻まだ貫はぬこけし初明り
新しき雪の一尺初景色
八重垣の山しろがねと初日記
三食のほかにあれこれ寝正月
なづな打つうしろに夫の薄笑ひ
七種の入り華やぐ大土鍋
輪が村は雪のゆつくりできるらし

明智 藪

岩木 茂

去年の闇包みて畳む新聞紙
桐の実のからんと落ちて年明くる
初湯出て話のなかに戻りけり
あたたかき大寒の日が暮れてゆく
芯のある水を解して紙を漉く
龍太亡し氷の中の龍の玉
明智藪あをあをと冬尽きんとす

豆を打つ

田村すゝむ

今が旬寒九の水を一気飲み
寒を生くつくづくと見る生命線
梅咲くや十年先の吾が姿
本棚を占むる俳書や小鳥来る
転ばぬ事が第一にして名草の芽
介護所の吾が部屋四角豆を打つ
花りんご十字造りの無言館

鶴川蓮清寺

田中佐知子

春の雪師にまみゆ傘たたむなり
淡雪や会ひ得しことを声にして
待春や手向けの水の墓碑伝ふ
線香の煙透巡春の雪
笹鳴やひとり遅れて墓を辞す
墓を辞す蠟梅の香を後にして
今生の紺の極みの竜の玉

雪が降る

土井ゆう子

雪が降る生家なけれど帰りたし
城のあるふるさとはいま雪明り
大泣きの赤子抱かれて初湯殿
露天湯は眺めるだけの初湯かな
隣り合ふクレーン動きて寒に入る
もう少し生きるつもり齋粥
まだまだと赤き手套を贈りけり

雪こんこ

中村 洋子

雪こんこ空がはがれてくるやうに
重ね着て手足短くなりにつけり
歌垣の山ふところの冬重
松飾る里に目の神耳の神
越前の荒海見つつ雑煮膳
たまきはる命七草粥熱き
稲荷社の一灯昏し冬の暮

初景色

森高 武

初景色海を眺めて子等帰る
足下に二日の海の波砕け
掴み取れさうな白雲冬鷗
海水で流し鮭の糶終はる
金箔の酒を一口蕪鮓
鴨鳴きて沼の静寂を戻しけり
寒濤や雷神様は右手上げ

山河集

同人作品



南うみを選

やはらかきお辞儀をされて大旦
冬木の芽我も背筋を伸ばしけり
竹爆ぜて恵方の闇を突き破る
葉牡丹の渦に省略なかりけり
くれなゐの色を見てゐる寒暮かな

上辻 蒼人

空に星粕汁よそふ嬬座かな

石井美智子

白神の水に戻すや凍豆腐
朝市の寒鮎売りの瀉訛り
黒胡椒カリリカリりと春を待つ
冬萌や並木は空へ手をかざし

梅咲くと書齋の窓を少し開け
初詣ぼけ除け地藏に長き列
立春の雨はやさしき恋の水

杉本葉子

火を潜り白磁となりて寒明けぬ
瞑想の午睡に変はる春の雨

奥田 茶々

注連飾つけて海辺を来る電車
船祝ひ宙とぶ蜜柑奪ひ合ふ
鯽起し氷見の旅寝の耳尖る
重ね着を一枚脱いで鬼ごっこ
大きめのネットクレス買ふ春隣

上村 葉子

師系五代しつかと繋ぐ初山河
元朝の日のやはらかし番鳩
夫の焼く出し巻玉子女正月
初場所や鬢付けの香と擦れ違ふ
冬木の芽やがて多弁となる気配

日脚伸ぶ

中村 洋子

浜名湖は「海の湖」てふ日脚伸ぶ
湖渡るロープウェイに冬日当つ
てぶくろの一本づつを指深く
正面に雪被りをり富士の山
水鳥のこゑの集まる浮見堂
着ぶくれて湖岸をたたく波を見る
バスに乗る坐つた途端大嚏
昼食はうな重と決め室の花

掌に囲ふ蜜柑をひとつ風邪の神
蜜柑狩小さき成りの甘さかな
冬夕焼マネの「黄昏」彩となり

秋葉山館山寺 山館山寺なり冬の虹

本堂の横の消火器十二月
穴大師後ろの寒さ静かなり
咳ひとつ落して拝す観音像

野面積浜松城の二重・三重返り花

息白く地下の大井戸覗き込む
冬の灯兜の「羊歯印」掲げゐて

ガムラン浜松市楽器博物館の祈りの響き冬ぬくし
冬うららガイドツアーに参加する

風土独語／南 うみを



葉牡丹の渦に省略なかりけり 上辻 蒼人

「葉牡丹」はアブラナ科でキャベツの仲間です。観賞用に品種改良され、赤紫や淡黄、白を帯びた葉が牡丹の花のように重なり合って広がる様子から「葉牡丹」と呼ばれています。作者はその美しさを一枚たりとも、また一髪たりとも「省略なかりけり」と断定しました。この美しさに魅入られた器師の「葉牡丹の渦の芯より眼ぬく」を思い起こします。

暗転に咳ひとつ生まれけり 森田 節子

「暗転」とは演劇で、幕をおろさず、舞台を暗くした中で場面を転換することを言います。これは歌舞伎の舞台でしょう。観客が暗がりの中で、次の場面への転換を固唾をのんでいる中、「しわぶき」がひとつ起きたのです。これですますます緊張感が高まります。

白神の水に戻すや凍豆腐 石井美智子

「白神」とは白神山地のことで、世界最大の山毛櫨の原生林は

世界遺産になっています。その「白神の水」に「凍豆腐」を戻し、いただくのです。おそらく豆腐自体が「白神の水」で作られたものです。故郷の自然の水を褒め称えた句です。

瞑想の午睡に変はる春の雨 杉本葉王子

「瞑想」とは目を閉じてあれこれ考えをめぐらすことです。作者のことを考えると、新薬の開発に想いをめぐらしていたのかもしれない。ところが睡魔に襲われ気が付いたら寝入ってしまったのです。これもすべて暖かな「春の雨」のせいです。

空つ風歩めば鼻の尖りくる 石井 秀一

関西在住の筆者は「空つ風」の体験がありません。しかし「鼻の尖りくる」感覚は共有できます。砂塵が鼻にぶつかり、獣の鼻のように鋭敏になる感覚です。

冬木の芽やがて多弁となる気配 上村 葉子

この句は「冬木の芽」を擬人化しました。「多弁となる気配」で、春の「木の芽」へ更に「若葉」へと賑やかになってゆくのを気配として感じているのです。佳い感受性です。

鯰起し氷見の旅寝の耳尖る 奥田 茶々

富山湾の水見と言えば、鯰漁で有名です。作者はその鯰を味わうためにやってきたようです。まるで明日の豊漁を約束したかのように「鯰起し」が鳴るではありませんか。耳だけが覚醒して寝られませんか。「氷見」という固有名詞が生まれました。

風土集



南うみを選

島の児の縄手作りの門松立つ 川崎 森田 節子

初神楽呪文も楽の調べなす

繭玉に役者番付かがやけり

匂やかに役者の女房春着かな

暗転に咳ひとつ生まれけり

年越の鬼追ふ錫杖延暦寺 東京 奥田 茶々

樽酒は金箔入りや初明り

名を記す一膳のみの雑煮箸

金団を浚ふ大匙寒に入る

ふり乱す大王松や空つ風

空つ風歩めば鼻の尖りくる 神奈川 石井 秀一

三日はや港を離れ船の笛

能面はどれも耳なく雪女郎

着ぶくれて身内の澱の薄れゆき

ここよりの山は横顔山眠る

風の譜に星ちりばめて去年今年 相模原 岡本 尚子

艫の音の冴えて湖面の朝ぼらけ

日本橋

月冴ゆるいざ天空へ麒麟像

寒林にひつかかりをり朝の月

轆轤挽く寒九の水に濡らしつつ

春風や搭乗口へまづ妊婦 松山 瀬戸 薫

鶯やひかり失ふ友の居て

雪嶺の富士を背に立つ風車かな

蜷の道消さむと泥鰌身をくねる

余白まだたつぷりありぬ蜷の道

病む人に亡き人に年忘れかな 上尾 根岸 善行

ふるさとのふところふかし冬ぬくし

寒の水言の葉一つ載せてをり

一番星名残りの冬を輝かす